東京都市大学　都市生活学部 開設シンポジウム開催

『都市づくり、街育ての新潮流』をテーマに討議。

ハード志向からソフト融合への方向転換を強調

学校法人五島育英会（東京都渋谷区、理事長：山口裕啓）が設置する東京都市大学（旧：武蔵工業大学　東京都世田谷区、学長：中村英夫、2009 年４月より改称）は、2009 年 11 月 17 日（火）、午後３時５分から午後５時 50 分まで、『都市生活学部 開設シンポジウム』を、セルリアンタワー東急ホテル（東京都渋谷区）地下 2 階ボールルームにて開催いたしました。

当日は、東京都市大学 中村英夫学長の開会挨拶に始まり、日本建築学会 佐藤滋会長、日本都市計画学会 武内和彦会長、セコム(株) 原口兼正代表取締役社長、東急不動産(株)　植木正威代表取締役会長による来賓ご挨拶と続き、その後、東京都市大学都市生活学部 平本一雄学部長から都市生活学部の内容と特徴が紹介されました。10 分間の休憩を挟んで、国際的に活躍する建築家でもある東京大学 隈研吾教授、日本橋の活性化などに取り組む都市プロデューサーの北山孝雄氏、大手町・丸の内・有楽町（大丸有）地区の再開発を担当する三菱地所(株)執行役員 合場直人氏、企業経営戦略から地域活性化まで幅広く手がける東京都市大学の谷口正和客員教授、エリアマネジメントを全国で展開する同小林重敬教授の５人をパネリストに迎え、都市生活学部 平本一雄学部長をコーディネーターに、『都市づくり、街育ての新潮流』をテーマとしたシンポジウムを実施しました。

以下、シンポジウムの内容をダイジェストでご紹介いたします。

ハード主体からソフト融合へ変わる都市づくり。街を育てる発想が大切

「都市は人間の活動によって成り立っています。これまでのように工学的発想でハードを作り出すだけでなく、人間の活動を活性化させるソフト面をも重視しながら、街を育てていく発想が求められているのではないか」というコーディネーター、平本一雄学部長(左写真)の問いかけから始まったシンポジウム。これに対して、「世界中で仕事をすると、日本のように建築や土木など縦割り的なシステムでは、おもしろい空間を創れないと実感している。枠組みを払拭し、境界を越えていくエネルギーと柔軟な発想が必要です」（東京大学 隈研吾教授）、「10 年ほど前から日本橋の街づくりに取り組んでいるが、自分たちの生活実感や地域の歴史を大切にすることが重要と考えている」（北山孝雄氏）、「大丸有地区の再開発、とくに丸の内において、商業地域が非常に拡大している。ソフトがついてこない

と街は陳腐化する。人の力を結集してハード面を活性化していきたい（三菱地所 合場直人執行役員）、「都市は人・もの・金・情報の集合集積で成り立っているが、とくに人が集まる機会を捉えなければいけない。桜が咲いた上野公園に 80 万人が集まることから分かるように、これからは町おこしならぬ、“ 時おこし ” を考えるべき。場を活性化させるためには、時をつくるのが効果的」（東京都市大学 谷口正和客員教授）、「都市をつくる時代から育てる時代に変わってきたのは事実。社会資本整備の時代は終わり、“ 社会関係資本 ” を構築する時代に突入した。都市を育てるためには、そのエリアに集まる関係者すべてが集まって、社会関係資本を充実させないといけない」（東京都市大学 小林重敬教授）など、それぞれの立場に基づいて多様な発言が出されましたが、ハード一辺倒の都市づくりがすでに転換点を迎えていることについて、パネリスト全員の意見は一致していました。

東京大学
隈　研吾　教授

都市プロデューサー
北山　孝雄　氏

三菱地所(株)執行役員
合場　直人　氏

東京都市大学
谷口　正和　客員教授

東京都市大学
小林　重敬　教授

歴史や文化、芸術に配慮しながら都市をブランディングする

東京都市大学に 2009 年 4 月新設された都市生活学部では、『渋谷クリエイション２０３０』※を作成するなど、すでにユニークな研究活動を繰り広げています。そこでは、渋谷地域のブランド力を高めるための施策が提案されており、本シンポジウムでも、続いて『街のブランディング』がテーマとなりました。「日本では、ブランドというと “ もの ” を指すと考える傾向があるが、もともと海外の高級ブランドはショップの存在感を高めることから価値を増していった。街もその独自性を強化すれば、ブランド化されて、人々により強くアピールできます」と谷口氏が口を開くと、「1980 年代まで、高級ブランドは、自社のブランドイメージをそのまま海外店舗に移植する施策をとっていましたが、東京への進出にあたってルイ・ヴィトンは、地域性とのバランスを勘案するようになりました。グローバルとローカルとの出会いが、ブランドに新しい力を与えると気づき始めたようです」と、隈氏。これを受けて北山氏は「日本政府観光局は 2010 年までに訪日外国人旅行者数 1000 万人の実現を目指していますが、とくに観光客にとって日本独自の歴史的、文化的な景観や町並み、商品がなければ魅力は半減します。その点、日本橋などは世界的なブランドになるのではないかと思う」と、持論を展開。さらに、合場氏は日本最初のオフィスビルとして明治 27 年に完成し、昭和 42 年に解体された三菱一号館の復元について触れながら、「高度成長期からバブル期にかけては、オフィス空間を作って貸し出すのが当社のミッションでしたが、バブル崩壊後、あらためて国際都市としての価値を考えたところ、歴史的景観や文化、芸術まで包含して、街を活性化させなければ世界とは戦えないことが分かりました」と語りました。

新しい都市づくり、街育てにはコミュニケーション力を持つ人材が必須

都市生活学部は、都市の文化、空間、住環境をデザイン（企画）し、マネジメント（実現化）するための知識、スキル、経験を体系的、実践的に学ぶ、ユニークな社会科学系の学部であり、豊富な経験と実績を持つ各分野のエキスパートを教員に配している点でも特色があります。そこで、シンポジウムの３つ目にして最後の論点では、新しい都市づくりに必要とされる人間像が検討されることになりました。平本学部長が、「著名な建築家であるレム・コールハースが、近年マーケティング会社も設立したとのことですが、建築家にも商品開発やマーケティングなど幅広い職能が必要とされているのでしょうか」と切り出すと、同じ建築家である隈氏は「国際的に仕事をする場合は、コミュニケーションのある人が重用されるのは間違いない」と、求められるスキルに言及。谷口客員教授も「日本の技術力はすばらしいが、その分全体として造形型のスキルに偏っている。問題を発見し、共有することができなければ、せっかくの技術を十分生かすことはできない。その点でもコミュニケーション力は大切なファクターです」。合場氏、小林教授の両名も、「街づくりでは、異なる職能、立場、年齢、性別の人たちと幅広く関わらなければならないので、よけいにコミュニケーションの力が問われるでしょう」と、同調しました。最後に、平本学部長が、都市生活学部で優れた人材の育成に傾注することを約束した上で、「今回はきわめて有意義で多様な意見をうかがえた」と締めくくり、シンポジウムは幕を下ろしました。

※　渋谷クリエイション２０３０

平本学部長、小林重敬教授、多田宏行教授ら東京都市大学都市生活学部教員有志 12 名によるプロジェクトチーム『東京都市大学　都市生活学部　渋谷 2030 研究会』が、2009 年９月に発表した研究論文のこと。渋谷地域の現状分析にはじまり、ライフスタイルと文化、ストリートの景観デザイン、都市環境、都市ブランドの創造と都市経営など、多角的に 2030 年の渋谷像に肉迫しています。

当日は、会場において、2030 年の渋谷の街並みを予想しビジュアル化された 3DCG アニメーションも披露された。

【付記１—開会挨拶要旨】

中村英夫学長　開会挨拶

「私どもの大学は、4 月から東京都市大学として新たな道を歩み始めています。新しい学部を作るに際して、一番に考えたのは、社会のニーズはどこにあるかという点です。今や人口の４分の３が都市に住む時代であり、そこから生じるさまざまな課題に対応できる学部が、社会から求められているものと考えました。また、本学が所在する東京世田谷と神奈川横浜は、日本でも有数の教育・生活水準が高い地域であり、これらの地域で学生諸君を集めて、教育活動を展開することにより地域貢献を果たしたいとも思ったわけであります。都市生活学部には、企業や大学などから大変優秀な先生方にお集まりいただき、たっぷりと時間をかけて、教育の方向性や将来の進路を検討していただきました。結果として、都市の居住、都市経営、都市文化につきまして教育・研究を進める日本で唯一、世界でも類例のない学部を開設できたと思います。将来的には学科の拡大も視野に入れ、東京都市大学の中核的な学部へと育てていきたいと考えております。本日はさまざまな立場の先生方にご参加いただきました。忌憚のない意見をいただき、これを大学・学部の発展のために生かしてまいりたいと存じます」

【付記２—来賓ご挨拶要旨】

日本建築学会会長　佐藤滋氏

「貴大学は、工学系の伝統ある大学として、多くの人材を世に送り、産業発展に大きく貢献されています。時代の要請に応えるべく、工学の枠を超えた新しい都市生活学部を設立され、ユニークな研究教育に邁進されることに敬意を表します。少子高齢化、地球環境問題、地震への対応など、さまざまな困難に、ハードとソフトが一体となって対応しなければなりません。技術も複雑化し、社会も多様化していますが、こういう時代だからこそ、都市に対する豊かな感性と実践力を持つ人材育成を目標に据えるのは、まことに時宜を得たものであり、建築の分野からも大いに期待しております。建築学会では、この度定款を改正し、社会貢献をその目標に加えます。今後、地域社会などと幅広く連携しながら、社会に貢献していきたいと考えております。都市生活学部は、ハード、ソフトを含めた人材育成に取り組むとのことで、まことに頼もしく感じます。多くの有意な人材を輩出され、新しい風を吹きこんでいただくことを期待しております」

日本都市計画学会会長　武内和彦氏

「都市計画学会は、都市と地方計画に関する科学技術の振興を図る目的で設立され、学会誌の発行や、発表会、国際シンポジウムの開催、学会賞の表彰などを通じて、この分野の発展に努めてまいりました。2001 年度には本日のパネリストでもある都市生活学部の小林重敬教授が会長を務められております。都市計画の課題は、20 世紀後半までは、都市化の波を解決し、計画的に都市づくり街づくりを進めていくことが中心でしたが、21 世紀は、人口の減少や少子高齢化など諸問題にいかにして取り組むかがテーマとなります。環境、防災なども考え、都市のあり方を根本的に見直すチャンスといえるかもしれません。ハードの整備に重きを置いた 20 世紀までと異なり、既存のインフラを活用しつつ、その中でいかに豊かな都市生活を実現するかが問われています。都市生活学部は、都市の文化、経営、居住を対象に、都市の新たな創造を目指す文系学部と言うことで、大変期待しております。今後の日本の街づくりに貢献する人材育成をお願いするとともに、東京都市大学の発展と都市生活学部の活躍をお祈りいたします」

セコム株式会社代表取締役社長 原口兼正氏

「私はちょうど 35 年前に武蔵工業大学の工学部電子通信工学科を卒業いたしました。東南アジアの主要都市には戸建て住宅が少なく、ほとんどがマンション、集合住宅です。私ども（セキュリティシステムの会社）にとって、ビジネス上参入するのが難しいことになります。同じように、東京の一極集中が進んでも、ビジネスチャンスは広がりません。地域の都市を活性化させ、地方が住みやすくなるのが理想だと思います。これから東京都市大学、都市生活学部からオールマイティの力を持つ人材が輩出され、地方と都市の活性化に貢献してくれることを願っています」

東急不動産(株)代表取締役会長 植木正威氏

「東急グループの経営者の一人としてご挨拶いたします。私どもはさまざまな都市づくり街づくりを手がけ、現在渋谷地域で進行する大規模な再開発にも参加しております。渋谷は若者文化の中心とのイメージがありますが、再開発では多世代の情報発信拠点を目ざし、東急グループのコンテンツを活用しながら、新しいかたちを創造したいと思っております。都市生活学部は、都市をテーマに魅力ある街や住まい、商品・サービスを企画できる理系と文系が融合した新しい社会科学系学部ということですが、それは私どものニーズと合致しております。建物や施設の器だけでなく、環境や地域との融合や、コミュニケーションを生み出す仕掛けなどソフト面が事業性を高めるものだからです。人間環境の価値増進を社会的使命とする当社はもちろん、「美しい時代へ」を標榜する東急グループも期待しております。専門分野を学び、関連分野を広くきわめて３年後には社会へと巣立つ卒業生が、企業と社会を成長、発展させる力になっていただきたいと強く願っております」

ご注意：このレポートは、2009.11.17 に開催されたシンポジウムの内容を基に編集したものです。
ご登壇者のご所属・ご役職等については、本日現在と異なる場合がございます。
あらかじめご了承ください。

東京都市大学　都市生活学部　都市生活学科
所在地：〒158-8586　東京都世田谷区等々力 8-9-18　(等々力キャンパス)
TEL：　03-5760-0104(代表)
交通アクセス：　東急大井町線「等々力」駅下車　徒歩 10 分
学部ウェブサイト：　http://toshiseikatsu-gakubu.jp